

栃木県からは私が登壇させていただき、主にHANDSプロジェクトの諸事業を通じた、県内の外国人児童生徒支援の実践について報告しました。県内全中学校に依頼して毎年実施している進路調査や、教育委員会担当者や学校長によって組織される「外国人児童生徒教育・グローバル教育推進協議会」など、教育現場との協力関係構築を大きな成果として報告しました。最後に、HANDSプロジェクト代表の宇都宮大学国際学部田巻松雄教授より、北関東3県が協力することの必要性や、今後の協力体制の重要性について意見が述べられました。

茨城県、栃木県、群馬県の北関東3県には、外国人を取り巻く状況（労働環境・国籍構成・児童生徒教育問題）について、いくつかの共通

点があるといわれています。したがって、情報を交換したりノウハウを共有したりできるネットワークが構築できたことは、課題の解決に向けた大きな前進と言えるでしょう。しかし、当の主役は大学機関やNPO団体ではなく、悩みや問題を抱えた外国につながる子どもたちにほかなりません。構築されたネットワークは、その成果を主役の子どもたちに還元できた時に初めて、その意義が認められるものと考えています。待ったなしで成長してしまう子どもの言語・学習支援やキャリア形成を考えれば、北関東を見据えたHANDSプロジェクトとしての次のアクションが、早急に望まれるところかもしれません。

## 感想・意見等アンケートより(抜粋)

### 〈第1部について〉

- ・ 生の声が聞けて、刺激的だった。もっと時間を多くとっていいのではないかと感じた。(学生)
- ・ 外国につながるのある子どもたち、先輩(宇大生)の思いを会場の人たちと共有できたのは、とても良かった。(他大学研究者)
- ・ HANDSプロジェクトの学生さんたちのがんばりに感激しました。(日本語教室ボランティア)

### 〈第2部について〉

- ・ 文科省より直接話を聞いたのが有意義であった。(小学校日本語教室担当教員)
- ・ 日本国籍で日本語指導が必要な児童数が多いのに驚きました。(学生)
- ・ ちょっと消化不足でした。来年度からのことが不安になりました。(中学校外国人児童生徒教育拠点校担当教員)
- ・ 何事も新しくはじめるというのは難しいものだと思います。案ずるより産むが易しともいいますが、はじまって色々悩みながらだんだんと定着していくのでしょうか。生活科しかり、外国語活動

しかり…。(小学校日本語教室担当教員)

- ・ 疑問が残りましたが、文科省の担当者が今日来てくれたことと特別の教育過程における日本語指導が開始されることは、大きな第一歩だと思いました。(通訳、ボランティア)

### 〈第3部について〉

- ・ 本堂さんのお話を聞いて、「学校だけ」でできることには限界があるな、と改めて思いました。外国につながる子どもたちは、家に帰ってからもサポートを必要としています。そこを何とか補えないだろうか、と思いました。(小学校日本語教室担当教員)
- ・ 進学率・貧困・ネットワークといったキーワードを元に、問題の大きさを実感しました。(学生)
- ・ 外国につながる子どもを取り巻く厳しい環境、また周りの日本人も外国とともに生きていくための課題など、社会が抱えている問題について気づくことができた。(小学校日本語教室担当教員)
- ・ 今まで目を向けなかったサイドからの外国人の

生活が見られてよかった。(小学校外国人児童生徒教育担当教員)

〈全体を通して〉

- ・様々な視点とアットホームな雰囲気作りを用意していただきありがとうございました。公立小中教員、大学関係者、大学学生、NPO関係者、ボランティア支援者、当事者の子どもたち、国等の

行政担当者が一堂に集まる機会はめったにないので、大変有意義でした。(他大学教員)

- ・HANDSの活動にさらに興味を持ち、あらゆるテーマに対して議論している中で気づけたこともたくさんあり、とても貴重な体験が出来ました。ムイントオブリガード！(外国につながるのある県内高校生)

## 第3回「外国人児童生徒・グローバル教育推進協議会」報告



宇都宮大学 HANDS プロジェクト代表

田 巻 松 雄

2013年度第3回「外国人児童生徒・グローバル教育推進協議会」が2014年1月27日(月)に開催されました。協議会はHANDSが始まってから12回目の開催になりますが、今回特筆すべきは、栃木県立学悠館高等学校の福田智校長に来ていただき、「学悠館高校における、日本語が不自由な生徒等への支援について」という題目でお話しいただけたことです。高校関係者の参加は初めてのことです。

HANDSは、小中学校の先生方や県内各市町の教育委員会の先生方にご協力・ご支援いただきながらここまで来ましたし、その過程で様々な関係者のつながりを作り上げてきたと思っています。しかし、高校の先生方とのつながりがなかなか進まなかったという現状があります。中学校までの外国人児童生徒教育支援について活動していますが、高校に入学した外国人の子どもたちが、その後どういう進学状況なのか、高校中退の子どもがどれくらいいるのかなど、気になりつつもその辺の実態についてはわからないままでありました。今回、福田校長のご協力がいただけまして、高校の現状や課題などについて多く学ばせていただきました。これを機

会に、高校の先生方ともより一層関係作りを行っていきたいと考えております。

学悠館高校は、定時制と通信制で、2学期制。在籍生徒数は、約1000人。内訳は、定時制650人、通信制350人。広い地域から登校、多いところは、小山100人、栃木100人、足利100人、宇都宮100人。日光、鬼怒川、那須などからも含め、全県から通学しているそうです。

特に印象的だった話を1つだけ紹介します。学悠館高校の定時制課程では約30名の外国籍生徒(多くがペルーなどのスペイン語圏)が在籍しており、優秀な成績を収める生徒から日本語の理解が困難で単位修得がおぼつかない生徒までいるそうです。共通して言えることは、お金に困っている傾向があるということです。全日制の前任校にも外国籍の生徒はいたそうですが、言葉の問題もお金の問題もクリアされていて、卒業後も大学進学や就職をし、在家の生徒はいなかったそうです。全日制と定時制では、そこで分かれるのかな、と強調されていました。定時制に来て、学習意欲の高い子とそうでない子にわかれるのが実態で、高い子については、アルバイトしながらも勉強し、国公立大学に入